計画行為における価値づくりに向けてのまちづくりコンクールの
有効性に関する考察

東京都世田谷区, 熊本県水俣市の場合

STUDY ON COMMUNITY DESIGN CONTEST FOR PLANNING HUMAN LIVING
VALUES IN COMMUNITY BUILDING
Cases in Setagaya ward and Minamata city

倉原 宗孝*, 延藤 安弘**

Munetaka KURAHARA and Yasuhiro ENDOH

We need to move toward a sense that community building let the living values of residents grow up through the common and three types of ecology (environmental, social and spritual).

The purpose of this paper is to evaluate the community design contest held in Setagaya ward and Minamata city from this view point of living value. Through community design contest the activities for the community building and various expressions of living environment by picture maps and so on were presented.

Residents expressed their various living values for examples, learning with pleasure, existence with nature, soft environmental management and so on. And it was ascertained that picture map is effective means for fostering living values of residents.

Keywords : *community building, living value, community design contest, picture map*
まちづくり, 価値づくり, まちづくりコンクール, 絵地図

1. 課題の背景

1.1 計画行為における価値づくり

居住環境整備においては、従来、計画の担い手は自治体・プランナー等どちらかといえば専門家側のものであった。そこではアンケート等により住民からの情報を把握するといったことは行われているものの、個々の住民が抱く愛着、誇り、感動といった主観的な情報を計画行為に映しだそうとする試みは少ない。しかし住民を単なるデータとして、客体として位置づけるのではなく、まちをつくり変える主体として位置づける必要性が強調されつつある¹⁾。このことと符合するように、まちづくりの分野における計画の「ソフト化」がいわれるようになってきている。居住環境整備計画の分野では、それにかかわる多様な主体を組織化する役割と、主体間のあるいは事業間の関係性を調整する役割、そのソフト技術が問われている²⁾。

ところで、まちづくりとはここでは「住民の参加を前

提とした生活者の身近な環境づくり³⁾」を意味するが、個性あるまちづくりを進めるためには、それを担う「自覚的な生活者の形成」および、「地域に内在する、あるいは住民各層が抱く固有の価値に着眼し、その価値を高めていく方向」が問われている⁴⁾。

さらに、まちづくりにおいては持続的発展の可能性 (Sustainable Communities)⁵⁾ が新しいキーワードとなりつつある。それは、地域住民や関係主体が「コモンズ」を共用し、環境の「エコロジー」(生態・社会・精神)⁶⁾ を重視することを通して、無意識のうちにひとりひとりの倫理・価値観を高めることを意味し、そのことはこれからのまちづくりの最も重要な課題である。

こうした課題の背景をふまえるならば、これからのまちづくりにおける計画行為は、既成のモノづくり一辺倒の価値化の支配的様式をこえて、また、今日までの居住環境整備の計画行為の範囲⁷⁾をこえて、環境や他者との共存に向けての感性・知性・欲望を多様に触発し、目に

本研究は、1991年度日本建築学会九州支部研究報告(沖縄)において発表したものに加筆・修正を加えたものである。

* 熊本大学工学部建築学科・工修

Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ. of Kumamoto, M. Eng.

** 熊本大学工学部建築学科 教授・工博

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ. of Kumamoto, Dr. Eng.

見えない潜在的な要求をくみつくすことまでも含む必要性が高まっている。

そのためには、地域に潜在する要求、住民各層が抱く個々の思いを引き上げ、膨らませていくこと、つまりその地域の、そしてその地域に生きることに対する「価値づくり」の過程も計画行為とみなす必要がある。ここでいう価値づくりの計画とは、「生活者それぞれの価値や目標自体を創造的に発生させる計画」⁸⁾のことである。

1.2 「つくる」ことへのかかわり

このような認識とともに、価値の選択や価値づくりを含むようなより包括的な計画方法論の構築のために、ユーザーが計画過程で何らかの意味での「つくる」ことにかかわることの現代的意義に着目してみたい。「つくる」とは物質的生産行為であるとともに、かかわる人間の内側に高揚心や感動を呼ぶ精神の活動でもある。つくるという行為のなかで人は、心を刺激し、ワクワクさせ、時には失望、挫折を覚えながらも、精神的満足を得てきた。

だが現代の高度産業社会における、生産と消費、計画者と利用者の関係が乖離した状況は、「つくる」ことを利用者から隔絶させている。

技術的文明の発展、計画技術の発達の中、人々は、強い計画性⁹⁾のもとに与えられてきた環境のなかで、つくりたいという本能的な欲求を潜在的に集積してきたのではなかろうか。そう考えるならば、いくつかの事例¹⁰⁾にうかがえる住民の卓越したまちづくりへの発想や行動は、「地域力」¹¹⁾として集積した「つくる」ことへの欲求が顕在化した姿ともとることができる。

技術的文化的発達とそれにとともなう機械力、マスコミュニケーションの猛威に対して人間性の回復が叫ばれているなかで¹²⁾、「つくる」ことは現代社会において人間らしさをとりもどすための鍵でもある。同時にそのことは、計画行為におけるユーザー参加へのニーズに応えることにもなる。

こうした「つくる」ということに対して、さきに触れた「地域力」としてまちづくりにかかわる場合もあるが、いまひとつ、住民が身近な環境に対しての思い入れや感動を表現することは、広い意味での「つくる」ことである。

まちづくりにおいて固有の価値を与えるものは、そこに住み続けている主体の、経験の豊かさや多様さを感じとり、表現する能力である。身近な住環境のハード・ソフト両面の根元的な価値を発見しうる生活者は、その感動表現を何らかの方法でつくりうるものである。

身近な住環境の感動表現は、住民にとって独自の住環境に対する思いやニーズの反映であり、従来の狭い意味での計画のみによって、現状把握とあるべき空間の方向づけをするプロセスを越える内容を持つ。その意義を計

画者が汲み取るならば、計画者と住民の間に新しいチャンネルが生まれ、住民に潜在する主観的要求を計画行為に映し出す可能性がある。さらに、こうした「つくる」行為に生活者がかかわる中で、地域における「価値づくり」が生まれてくるものと思われる。

2. 目的と方法

2.1 本研究の枠組み

現代まちづくりにおいて、価値づくりの計画をいかになすのか。そのことをモデル化するとともに本論の枠組みを示したのが図-1である。

居住環境整備の一般プロセスは、居住環境の認知、思考、計画・設計、建設・整備、利用・管理・改善といったプロセスをとる(A)。これに対して生活者それぞれの価値や目標を創造的に発生させる上でBにみられるような住民参加の手法の実践・検討が各地にみられる。

本研究では、こうした手法の一つとして、住民による身近な環境の絵画的表現やまちづくり活動の記録などを公募し評価するという取り組みである「まちづくりコンクール」を取り上げる。これは、居住環境の認知や思考レベルで生き生きとしたものを生成する仕掛けであるとともに、身近な環境を相手に、住民が自らつくすることに身を乗り出す初発の場である。そこでは、計画行為における次のような役割と内容を想定することができる(C)。

●価値づくりの計画に向けて、まちづくりコンクールには、居住環境整備の一般プロセスに対して次のような計画行為における役割があるのではないかと考える。

- ① 生命文化的環境認識¹³⁾
- ② 楽しくつくり学ぶ中での感動表現・価値表現
- ③ まちづくり意識・活動の顕在化・高揚
- ④ 価値の転換・共有の場の生成

●上記の役割を促すうえで、まちづくりコンクールではいくつかの特徴的な手法が用いられる。

- ・絵地図を中心とした多様な表現
- ・専門家と住民間のコミュニケーションのある公開審査

本研究の目的は、こうしたまちづくりコンクールの計画行為における役割を考えつつ上記の4点の仮説を検証し、そのことを通して価値づくりの可能性を探ることにある。

2.2 絵地図の意義

以下に考案するまちづくりコンクールにおいて、参加者それぞれのまちへの思いが、「絵地図」¹⁴⁾という手法により表現された。これまでに絵地図について正当に議論しているものは見られないので、その特質・意義について記しておきたい。

見る対象を範囲を切り取り写實的に描く絵画に対し

図一 本研究の枠組み

て、絵地図はむしろ見るとおりには描かれず、寸法等の不正確さから客観的表現とはいえないが、「物的環境だけでなく人々の生活までが生き生きと描かれ、…空間を明らかにイメージしやすく」¹⁵⁾ するという特徴がある。

また日本の文化に深く根づいている絵図・図絵や絵巻等には、一つの画面の中に複数の時間が描かれる手法があり、2次元上に描かれた絵画を多角的に表現し、臨場感をもって見るものを引きつける力がある¹⁶⁾。

地理学の分野では、地図は「少なくとも市民のための、自由な表現精神の発露としての」それであるべきで、「市民の誰もが、学問や科学性に威圧されたり目をくらませたりすることから自由になって、のびのびと発言することができなければならない」といわれている¹⁷⁾。専門家

による固定観念をぬぐいさり、市民の自由な価値表現としてとらえるというこうした見解には、まちづくりにおけるプロとアマの壁を壊した新たな回路を築く上でのヒントと、そのためのひとつの道具としての絵地図の力を感じ取ることができる。

「環境の実体を知ること、つまり学習することから環境改善は始まるので、都市空間や生活環境をわかりやすく表現する図や絵は、学習の道具として大変重要な役割をもっていると考えられる」¹⁸⁾ が、その上で絵地図には、とりわけ住民の表現を多様化・開放化させる力があると考えられる。

2.3 調査・検討方法

本研究では、このような意義をはらむ絵地図によるまちづくりコンクールを最初に行った東京都世田谷区、お

よび次いで先進的にそれを行った熊本県水俣市のまちづくりコンクールを取り上げる。

調査方法としては、第1に、両コンクールの企画・審査の過程に筆者自らがかわり、審査過程の諸発言やコンクール参加者の反応を具体的に把握した。第2に、優秀作品の表現分析を通して、住民・子どもたちはいかなる価値表現をしているか、同時にそれは価値づくりの計画に向けていかなることを示唆しているか考察した。さらに、第3に、これらを主にしつつ、補足的に、応募者へのアンケート（回収率；世田谷 56.8%，水俣 70.8%）によりコンクールの評価に関する意見を採集し、筆者の共時的観察の客観性を保証するとともに、コンクールの利点や問題点、および今後の課題を抽出した。

3. 両地区まちづくりコンクールの背景および概要

世田谷区では、区民と行政が協力してまちづくりを行っていくために、「まちづくりセンター」の設置が検討されているが、1988年春から、「まちづくりハウス」という場を設けて実験的な活動を行っている。その試みのひとつとして、また、1988年から行われている「まちづくりリレーイベント」¹⁹⁾の一環としてまちづくりコンクールが行われた。

一方水俣市では、水俣の地域風土に根ざした住宅づくりに向け、1987年から「水俣市地域住宅計画（ホープ計画）」推進事業が行われているが、その一環として最終年度である1990年度にまちづくりコンクールが行われた。

全国的にみて、まちづくりに対する市民運動が盛んと思える世田谷においては、市民の潜在的活動をすくい上

げるために、「まちづくり活動の記録部門」が設けられている。また、応募期間中に、コンクールの説明会、まちづくりハウスにおいての相談・受付・参考事例紹介、「歩こう会」の実施がなされている。

水俣においては、「なごみともやいの住まいづくり研究会」等、この地域の価値を探る独自の活動が展開されているものの、市民レベルでのまちづくり運動の蓄積はまだ浅いと思われ、応募状況にみられるように、一般の応募が少なかった。

また、寄せられた作品に対する審査方法として、両地区とも公開審査という形がとられた。両地区で行われたコンクールの概要を表一に示す。

4. まちづくりコンクールの有効性の考察

本論の目的で仮説的に挙げたような有効性をまちづくりコンクールは持ち得るだろうか。本研究の枠組みであげた4点について以下に考察しよう。ここで両地区の優秀作品に描かれた対象要素を表二、3にまとめ、代表的な作品のいくつかを図一、2、3に挙げる。

4.1 生命文化的環境認識

住民・子どもたちが、身近な環境に目を向け、認識を高めていくことは、まちづくりを進める上で一つの重要な課題である。その点、表二、3を見てみると、両地区とも人間、自然、人工的建造物、交通手段に至るまで多様な生活環境要素が描かれており、コンクールを通して参加者が環境に目を向けるチャンスが広がっているといえる。

描かれた環境要素の構成比をみると（表二、3）、世田谷において、生き物、自然の比がそれぞれ6.2%，

表一 世田谷区および水俣市におけるまちづくりコンクール概要

	絵地図と記録でまちづくりに参加しよう ——まちづくりコンクール（東京都世田谷区）	こんな家・こんな町にすみたいナ ——まちづくり絵地図コンクール（熊本県水俣市）
コンクールの目的	住民の町に対する愛着、関心を高め、同時に無名のまちづくり活動の情報を集める。また、住民のまちに対する独自の視点を参考にし、まちづくりへの新しい視点を開く。	住民・子どもたちに、水俣ならではの暮らしの魅力を表現してもらう。いろんな視点からの魅力を共有し合いながら、まちへの関心を高めていく。
主 催	世田谷区まちづくり推進課、相談・受付、まちづくりハウス	水俣市／水俣市なごみともやいの住まいづくり研究会
募集内容	絵地図づくり部門 ・世田谷区のまちを対象とし歩いて回れる範囲であること。 ・まちへの関わり方を面白く表現していること。 ・表現方法、大きさは自由。 個人、グループは問わない。 ・中学生以下、一般に分ける。 まちづくり活動の記録部門 ・世田谷区を対象とする活動であり、内容がわかりやすく表現されていること。	「水俣市内の歩いて回れる範囲の地図を楽ししくおもしろく自由に描いて下さい」 ・市内に住む人なら誰でも参加でき「個人」でも「グループ」でもかまわない。 ・表現方法、紙の大きさ、紙質等全て自由。
応募状況	絵地図づくり部門 ・中学生以下 55点 (67人) ・一般 120点 (137人) まちづくり活動の記録部門 10点 (28人) 合計 185点 (232人)	・小学生の部 113点 (121人) ・中学生の部 298点 (333人) ・一般の部 43点 (43人) 合計 454点 (497人)
審査方法	公開審査 (1988.10.15)	公開審査 (1990.9.22)

No	作 品 名	創 作 主 体		内 容 ・ 評 価
		表 現 方 法		
作 品		まちへの関心の抱き方		
1	大蔵団地の自然ウォッチング	個人（主婦）	建設後約4分の1世紀が経過している古い団地に生息する野鳥から昆虫まで、様々な生き物の観察図。地図上にかかれた生き物たちの精密なイラストと、そこに添えられた「ヒマワリの実が大好き（シジウカラ）」「花や芝の上でヒルネをするのが大好き（トカゲ）」といったコメントからは、作者の身近な環境に対する豊かな関わりと愛着の大きさがうかがえる。同時にそこには、野鳥から昆虫まで自然のなかで共に生きることへの、この団地に暮らす作者の価値を認めることができる。この団地では古い住棟の更新計画が現実化しつつあるが、むやみに自然を削り取るのではなく、時をかけて育てられた自然の持つ価値を継承しつつ、団地の居住水準を高めていくことへのメッセージをこの作品は投げかけている。
	イラスト、コメント		
		団地内に生息する野鳥から昆虫まで様々な生きものに着眼し、そこに育まれた豊かな自然を表現。		
2	わらしべ長者地図	グループ 子ども18名、大人8名	グループ毎にトイレットペーパーをもち、それを街で出会う人ごとに次々に交換していくという、昔話のわらしべ長者をゲームとして行ったもの。その発想のユニークさは面白いの一語につきる。ゲームを終えると各グループ毎に、トイレットペーパーが何に変わったか発表し合い、エピソードや感想が話し合われ、それをまとめたのがこの作品。各グループの行動が絵地図として表現されていることもさることながら、自発的に企画・実践し、まちを相手に子どもから大人まで一緒になって遊んでいるこのゲームは、「まち遊び行動学」の典型といえる。まちを舞台に行われたそのプロセスの楽しさは、まさに絵地図大賞に値した。
	イラスト、コメント、写真		
		まちを遊びの舞台と化し、わらしべ長者というユニークな取り組みのなかで、まちにある様々な事物との関わり、出来事を連ねる。		
3	成城学園駅から成城さくら児童館まで絵地図	児童館の子供達13名、大人8名	地域の人々からもらった細かい布切れを材料に、児童館に来る子供たちが一人、二人と集まって、「この道ゆくね」「ここに本やあったよね」といった楽しい会話のなかで出来上がった作品。ケーキやドーナツで表現された建物、まちかどにいる大きなネコ、そこにはまちの楽しさがあふれている。とともに、パッチワークという表現には、いやな環境の部分を望ましい布地にはりかえてしまうことができるよさがある。望ましい色と模様の布切れを使って、まちの景色を好ましいものに変えていくこの方式は、「まちづくりはパッチワーク」の発想と手法を提示している。また、子どもたちの小さな力が集まってつくりあげられたこの作品は、まちづくりは住民一人一人の力の結晶であることを物語っている。
	パッチワーク		
		子供たちが感じる楽しいまちのイメージを共同で描き出す。		
4	大好きなこの町	母、娘	盲学校に通う娘さんとその母親が協力してつくり上げた作品。危険な場所を障害者の視点から指摘し、「すべての道に点字ブロックを」「横断歩道も音楽入りで」といった要求がかき込まれ、障害者のためのまちづくりの方向を示している。とともに、たくさんの緑や賑やかな商店街の様子、お気に入りの場所やまちで気付いた愉快なこと、絵地図上には、子どもから老人、そして小動物たちまでも楽しく暮らしている様子がちりばめられている。そこには、健康者・障害者という枠を超えて、誰もがみんな楽しく住めるまちへの作者の夢と提案があふれている。
	イラスト、コメント		
		障害者の視点から、まちのなかで感じること、望むことを提示。		
5	どろんこ、おひさま、草っぱら	自主保育グループ	保育園というハコだけが遊び場という捉え方でなく、まちの中全部を遊び場に、大きい子ども小さい子どもいっしょに様々な体験を重ねる自主保育グループの10年の活動をまとめたもの。「こんな動物をみつけたよ」「こんな草花をみつけたよ」「こんな遊びをしたよ」「こんな人と出会ったよ」といった見出しで丁寧にまとめられ、まちへの多様な関わりと、そのなかでのびのびと暮らしている子どもたちの様子がありありと伝わってくる。また、近所に暮らす人々に不快の念を与えないように気を付けたり、その一方で、バード・カービングを教えてくれるおじいちゃんや「きつね」の物語をしてくれるおばあちゃんがやってきたりと、地元地主さんの好意による空き地を舞台に世代を超えた交流が生みだされつつある。
	活動の記録集		
		子育ての立場から、まち中全部を遊びの場と捉え、大きい子ども小さい子ども一緒になって様々な体験を重ねていく。		

図-2 世田谷まちづくりコンクールにおける代表作品例

No	作 品 名	創 作 主 体	内 容 ・ 評 価	
作 品		表 現 方 法		
		まちへの関心の抱き方		
1	私の家とにわとりの散歩道	子ども (中3)	にわとりの目線から自分の住まいが描かれているこの作品には、5羽のにわとり家族と隣にいる2羽のうずらが登場し、人間達に面白い仕掛けをしてきて庭先を楽しんでいる。「さくをしてあるけど中に入って花を食べる」「いちじくの下は砂あそびをよくする」といったにわとりたちの仕草、生態が克明に観察されており、それぞれ名前がつけられ、性格までも見抜かれている。とともに表現方法において、家の内外を構成する様々なエレメントが、ピンクは花壇、黄色は押入というようにきちんと分けられており、住戸内外の魅力を読み込む力がしっかりと育っていることがうかがえる。そうしたことが、教科書っぽくではなく、にわとりというユニークな視点から捉えられているところには、にわとりたちと住戸まわりの関わりが、人間とまち・環境の楽しい関わり方の想像へと導いてくれる。
イラスト・コメント		
		家に住むにわとりの目線をとおして、住戸内外の魅力を表現。		
2	楽しい山道	子ども (小6) 3名	小さな紙切れをたくさん貼り合わせ、その素材のもつ良さをうまく引き出して描かれたこの作品には、このまちのもつ自然の豊かさが満ちあふれている。舞台となっている山道は、美しい色合いに満ちた草花や木ぎでかまされ、そこには土の道のもつ魅力が鮮やかに表現されている。細部に目を向けると大小の鳥たちもいる。その中で幸せに満ちた笑顔満面にたたえた子どもたちが楽しく遊んでいる。花や緑や小鳥たちに囲まれて自然と共に暮らしたい、そしてわがまちではそうやって暮らしていけるんだという作者の思いが見事に表現されている。わがまちへの愛着、誇り、自信が作品づくりを通して作者の心に膨らんでいくとともに、そこには未来のまちづくり人が力強く育っていると思われる。また、子どもの視点から提示されたこのような作品は、地元の人々に向けてのわが町への魅力の再認識への刺激となるだろう。
イラスト・絵		
		草花・緑・小さな生きものがいっぱい、自然豊かな山道の楽しさを表現。		
3	わたしのうち	子ども (小)	野良猫やクワガタをはじめ恐い猪やマムシたち、栗や柿といった実のなる木、畑にはきゅうり、なすび、大根といったいろんな作物、そういった地域独自の多様な環境要素を自分の家の周りに引き寄せているなかで、この作品はまさにこの水俣の地でしか生まれ得ない絵地図といえる。とともに、「ジョンの宝物の隠し場所」や、庭先の魅力的な部分を弟の野球練習所にと、他者、生きものへの関心や思いやりもみられる。そこには、多様な地域性ある生きものや植物に囲まれるなかで、独自の価値の創造が育まれていることがうかがえる。
イラスト・コメント		
		小さな生きものから恐い猪まで、地域の魅力を家の周りに引き寄せている。		

図—3 水俣市まちづくりコンクールにおける代表作品例

10.6%であるのに対して、水俣では、それぞれ約2倍の11.1%、25.7%となっている。逆に、建物・施設等の項を見てみると、水俣の19.5%に対し、世田谷では約1.5倍の28.5%となっており、自然豊かな水俣、都市化の進んだ世田谷と、それぞれの地区の特徴が描かれた環境要素の比に表れている。

しかし、どの作品にも共通することは、生き物・自然・人間の三者が共存できるまちであることへの願いが表現されていることである。例えば、豊かな自然の残る水俣では、にわとりが人間たちに面白いことを仕掛けてきたり(図—3中の1図)、緑いっぱいの山道で遊んだり(図—3—2)、小さな虫から恐い猪までいろんな生き物を家の周りに引き寄せたり(図—3—3)して、そのなかで暮

らす楽しさ・喜びが表現されている。

あるいは、同じ生きものをとらえていてもその表現に多様性がある。例えば、「生きもの」の項の犬の欄を見ても、犬の存在を表現している作品とともに、近所のすべての犬の詳細な観察を通し、犬との一体性をそのまちに住む価値として表現している作品もある(世田谷、表—2、3番)。また、にわとりの目から住戸まわりを見つめる(図—3—1)等、人工環境の枠を越えた生態系の視点から住環境をとらえる等の表現も見られる。まちづくりコンクールを通して参加者は、身近な環境との相互作用の中で内発的想像力を高め、その上で他の生きものへの共感心や人間のもつ優しい感情を育てていくという生命文化的環境認識を育んでいる。

4.2 楽しくつくり学ぶ中での感動表現・価値表現

各作品とも創意工夫によりイメージを高くしている。例えば、絵本仕立て、双六、おこし絵、巻物風等がある。その中でも特に、子どもから大人まで一緒になって、楽しみながらのまち点検等、「まち遊び行動」²⁰⁾を行っている「わらしべ長者地図」(図—2—2)には、地域を問わず行いうるまちづくり学習の独特の手法が提起されている。

また「成城学園…」(図—2—3)では、子どもたちが共同でまちのイメージを絵地図化していく過程で、互いに住環境への認識を膨らませている。とともに、この作品にみられるパッチワークという表現には、嫌な環境の部分を望ましい布地に貼りかえてしまうことができる良さがある。そこには、小規模な空間単位の積み重ねにより、より望ましいまちを構成していくという「まちづくりはパッチワーク」という発想と手法が提示されている。

絵地図という自由性の高い表現方法が、作者の環境に対する思いを独自の視点で開き、またそれは見るものに対して、まちづくりの発想を触発してくれている。

このことは、アンケートの創作体験に対する回答で、創作上苦勞・工夫したこと、創作体験の面白さ・楽しさについての書き込みが多いことからもうかがえる。「描いていると新しいまちの表情が見えてきた」(世田谷, 男. 40. 自治体職員)「自分の家のはずなのににわとりを主人公にしたら違って見えた」(水俣, 女. 中2)と、作者の行動・思いを空間と柔軟に対応させていく中で、環境に対する関心と想像力が膨らんでいる。

身近な環境への関心とそこでのモノ・ヒト・コトの動的關係のデザインということ、言葉としてではなく空間・絵画的表現をとることによって、よりヴィジュアルに、かつ従来の常識を逸脱した柔らかな視点、独自性に満ちた表現によって、感動を他者と共有する上で、絵地図は住民・子どもたちにとって魅力ある有効な手段であるといえる。同時に、作者がそうした絵地図を通して自ら楽しみながらつくるなかで、身近な環境に対する感動・価値が表現されている。

4.3 まちづくり意識・活動の顕在化・高揚

まちづくりコンクールの中で、地域に潜在している活動やそれらが放つまちづくりに向けての個的な視点がすくい上げられている。「どろんこ、おひさま…」(図—2—5)では、空き地という都市に存在する共用空間を、いろんな関係主体が、その知恵・技・芸を寄せ集めるなかでつくり、育て、守り、子育ての場としての柔らかな施設づくりを成している。

行政が計画する公共施設には、地域の特質・魅力が読み込まれず、味気ない、使いづらいものとなっている例が多いが、ここでは住民が手づくりで時をかけて育てるなかで、人間にとって優しい、住民にとって使いやすい、

そして住民が管理・責任を負うという、新しい共用空間づくりの方法が示されている。

住民が生活の中で苦楽を経験しながら蓄積してきた知恵・技・芸が、まちづくりコンクールを通して、主体間に共有されるとともに、地域の固有の価値を、まちづくりに生かすことの意義を行政・計画者に問い直している。

また、住民の生活の一部として草の根的に展開されているまちづくり活動が照らし出される一面ものぞかれる。「活動が停滞するとあきらめたり、投げやりになりがちですが、頑張っているのは私達だけじゃないよって思っ取直します」(世田谷, 女. 37. 主婦)等、地道な活動に光をあて、その意義を評価し讃え合うことは、関わる主体の励みとなり、今後の活動に向けての支えとなる。

同時に参加者はこうした作品創作の中で、身近な環境や住民相互の生活への関心・認識を広げ、深め、あわせてわがまちへの自信・誇り・愛着も高まっている(「つくづく私達はいい環境に住んでいるんだと思った、生物と一緒に住める、生きていける」水俣, 女. 小5)、「この町はもっとよくなる可能性があると思う。」世田谷, 女. 42. 主婦, 等)。人と人、人と環境のかかわりとそこで営まれる生活の質を高め獲得していこうとする心の向け方を「まちづくり意識」と呼ぶならば、コンクールを通して参加者のそれが大きく高揚している。

さらにそのことは、他者からのお仕合せではなく、参加者が興味と欲求を満たすための自らの創作体験から生まれたものである。人と人、人と環境の相互の刺激、苦勞をとめないながらも「出来上がったときは、つきものがおちたようにスッキリした」(世田谷, 女. 32. 主婦)という達成感、こうした体験をとめない生まれたまちづくり意識は、つくるプロセスに身を乗り出す中で参加者に内発的に生まれたものであり、そこには能動的に自らつくりだし、働きかけていこうとするまちづくり人が育成されている²¹⁾。

4.4 価値の転換・共有の場の生成

これまで見てきたように、参加者は作品創作を通して身近な環境に対する価値を各々の視点から表現している。両地区のまちづくりコンクールで行われた公開審査は、こうした価値がみんなの前にさらされ、多様な価値が相互に刺激し合う場となった。

例えば、図—2中の1には、自然とのかかわりの楽しさが表現されているが、同時に、一方的な開発整備に対する問題提起をしている面もある。そこでは、住棟間に生息する野鳥から昆虫まで、様々な生き物の観察を絵地図として表現しているが、単に身近な住環境の様子を描いたのではなく、団地更新計画において、時をかけて育てられた自然のもつ価値を継承していく重要性を示唆し

ている。そのことが公開審査の過程で議論され、単なる絵地図ではなく、そうしたまちづくりに固有の価値をはらんでいるそれとして評価された。居住環境整備を進めるうえで、行政・公共団体からは見えない住民の声が、まちづくりコンクールのなかですくい上げられている。

「他の人の作品が見れる、審査員の判断基準が聞ける、審査員の思い違いを訂正できる等公開審査はとても良いと思いました」（世田谷、女、41.無職）「審査員が、一見なんでもなく見える作品の価値を発見し、それについて話すのを聞くのが面白かった」（世田谷、男、27.当時大学院生）といった声にみられるように、公開審査では、住民だけでなく、審査員をはじめ、行政・専門家等まちづくりにかかわる多様な主体が相互に触れ合い、学び合う場が生成されていた。それは、ある種の開かれた「まちづくり学校」のあり方を示していたといえる。

また、「審査員が番号札をおいていく光景はハラハラしましたが、納得のいく、また感動的で、出席して良かったと思った」（世田谷、女、不明.主婦）といった意見のように、公開審査での感動と興奮²²⁾は、人間の内側からまちづくりにかかわることの喜びを深め、その志しを高める。とともに、関係各主体の相互理解の方向を導き、それぞれが役割の枠を持ちながらも、人と環境を取り巻くトータルな問題に共同で取り組んでいこうとする姿勢が各主体間に形成されていく。

まちづくりという視点で各作品を照らしていくとき、そこにはこれまで触れてきたような、既存の判断の枠を越えた、想像力豊かな住民・子どもたちが抱く固有の価値が映し出されてくる。そうした価値を発見し合い、評価し合っていくことは、人の生き方の証として行われている様々なまちづくり活動に新たな知恵と勇気を与えてくれる。大人だけでなく子どもたちにとっても、そこでの喜び・感動は、まちづくりにかかわること、生きることへの励みとなっている。

生涯学習の時代にあって、人と人、人と環境とのかかわりとそこでの価値を各主体間で相互に刺激し合い高め合っていくこと、そしてそれを地域内に広げていくこと、そのために互いの抱く価値をさらけ出し生成していく場としての公開審査は有効であり、各主体の抱く価値が転換・共有される場であるといえる。

5. まとめ

これからのまちづくりでは、住民が自らの住環境において暮らす上での、喜びや楽しさ、夢や生きがい、また、地球環境と身近な環境との連続性の自覚や、地域への誇りや愛着、あるいは改善すべきこと、足りないものを補うこと等、そうした住環境においての人と人、人と環境のかかわりの中で見いだされる価値を見つめ高めていく必要がある。

まちづくりコンクールの作品のなかで、住民・子どもたちが抱くその地域に暮らすことと、その環境のハード・ソフト両面の価値がすくい上げられている。同時に、そこで用いられた絵地図という表現手法は有効であることが確認された。また、そうした表現と評価過程が公開審査などにより参加者のまえにさらされるなかで、各主体間で多様な価値の生成・共有がみられた。

世田谷・水俣両地域において、子どもについては表現内容・水準とも同様であるが、大人についてはまちづくり活動の実績とコンクールにおける課題の有無により差異があった。この種のコンクールにおいてまちの魅力発見のみならず、まちづくり活動にも光をあてることは、住民参加のまちづくりを促す上に効果的である。

まちづくりコンクールにおける一連の活動において、住民の持つ個的な視点からまちづくりに新しい発想やアプローチの光が投げかけられることは、住環境を単なる「問題」としてとらえるのではなく、住民の主体的な独自の感動と表現によって、住環境を守り改善する内発的な能動的エネルギーを膨らませることにつながる。

またこうしたことは、計画行為における「調査」という視点からみれば、従来のアンケート配布・データ収集というスタイルを越えて、住民間に潜在している問題意識を覚醒させ、楽しい表現活動を通し、そこからモノづくりへのエネルギーを吸収しながら計画行為に向かうという、新しい意味の調査の視点を投げかけている。

以上のようにまちづくりコンクールは、計画行為における価値づくりの過程を生成することが考察された。

まちづくりコンクールが継続して行われることによって²³⁾、それが住民のなかに定着していくならば、コンクールに参加することを通してまちづくりへの生き生きとしたかかわりの意識と行動を住民の内側から高めていき、遊び心を持った取り組みのなかで、地域に生きる価値を解釈したまちづくりの方向が開けてくると思う。

しかし、こうした取り組みが一過性のものであれば、価値づくりにも、実際の居住環境の計画・整備にも影響を及ぼすものとなりえないという問題が露呈されよう。そこで今後は、その後継続して行われているまちづくりコンクールにみられる作品傾向、継続参加者の表現内容の発展とまちづくり意識の変化の分析を行うとともに、ハード面では現実の居住環境の計画・整備・管理にどのようなインパクトを与えているのか、および、ソフト面では地域の児童館や老人会等の活動にどのような影響を及ぼしているのかについて考察を深めたい。さらに、これらの定性分析に加え定量分析に至り、他の住民参加方式・計画行為との比較・分析に進みたい。

参考文献および注釈

- 1) 北原理雄は、「住環境と景観」をテーマとした研究の動向

- を考察する中で、心理的因子を取り扱う研究に対して、住環境形成の主体としての住民の価値を、動的にとらえる視点の必要性を述べている。北原理雄：「住環境と景観」をテーマとした研究の動向に関する考察—1975～1988, 都市計画論文集, No. 24, pp. 481～486, 1989
- 2) 高見澤邦郎編著：居住環境整備の手法—まちをデザインする, 彰国社, p. 11, 1988. 4
 - 3) 小澤紀美子：まちづくりと住民参加—事例にみるその多段階プロセス—, 都市建築の技術と手続き, 自治体学会編, p. 96, 1991. 3
 - 4) 延藤安弘：まちづくり読本—こんな町に住みたいナ, 晶文社, p. 10, 1990. 5
 - 5) Sim Van der Ryn and Peter Calthorpe : Sustainable Communities, Sierra Club Books, pp. xvi～xvii, 1986
 - 6) 環境のエコロジーのみだけでなく、社会のエコロジーと精神のエコロジーの三位一体的展開が必要であると、フランスの哲学者フェリックス・ガタリは述べている。フェリックス・ガタリ著, 杉村昌昭訳：三つのエコロジー, 大村書店, p. 114, 1991
 - 7) 高見澤邦郎は居住環境整備計画の機能を、①整備の目標像を与える、②主体の役割と方法を明らかにする、③主体間、事業間を調整する、④進行管理の役割がある、と4つに整理してみた。同2) p. 11
 - 8) 延藤安弘, 横山俊祐, 古川智博：コーポラティブ住宅の計画研究としての方法的位置づけ—ユーコートの特質とその計画原理 (1)—, 日本建築学会計画系論文報告集, 第396号, pp. 12～19, 1989. 2
 - 9) 高見澤邦郎は住環境研究の動向をとらえる中で、方法としての強い計画性から弱い計画性へ、対象としての新開発市街地から既成市街地への転換を示している。その変化は、昭和30年代に芽生え、40年代を通じて成長し、50年代に確実になったものとみられ、「パラダイムの変換」ともみなされるとしている。高見澤邦郎：住環境研究の動向—最近の都市計画分野において、日本建築学会都市計画委員会住環境小委員会, pp. 1～7, 1989. 3
 - 10) 住民の共通の生活上の課題を解きほぐすことに知恵と人力を費やし、「まちづくり構想」作成やそれにもとづく施設整備、住宅建設が行われている神戸市真野地区、遊び心のあるまちづくりを進めるなかで既存環境改善や地域の歴史・文化を継承する様々な活動を展開している大阪市平野地区、等をあげることができよう。延藤安弘：まちづくり読本—こんな町に住みたいナ—, 晶文社, 第1章, 7章参照, 1990. 5
 - 11) 宮西悠司は、まちづくりとは「地域力を高める運動」として包括的にとらえるべきだとし、地域力の概念を「地域への関心力」「地域資源の蓄積力」「地域の自治能力」という3つの構成要素で示した。宮西悠司：地域力を高めることがまちづくり—住民の力と市街地整備—, 都市計画 No. 143, pp. 25～33, 1986. 8
 - 12) 石田英一郎：文化人類学入門, 講談社, pp. 270～281, 1976. 7
 - 13) イディス・コップは、一人一人の人間による固有の世界観の形成というテーマを追求する上で、旧来の「精神生物学的」という用語を「生命文化的」と言い直し、そのことにより人間の個性を進化の歴史の流れの中に位置づけることが可能となるとした。イディス・コップ著, 黒坂美和子, 滝川秀子訳：イメージネーションの生態学, 思索社, p. 19, 1986. 9
 - 14) ここでいう絵地図とは、住環境に対する思いや感動を、基本的に空間と対比しやすくするものであるが、住環境に対する思いは住民・子ども達一人一人独自のものであり、その表現方法、視点、対象範囲等はすべて作者が自由に生み出すものである。また、生活空間を取り上げる際、住民の関心の的は、街区やまち全体といったマクロなものから、一住戸やある要素といったミクロなものまで多様である。そうしたスケールの大小に絵地図は対応しうるとともに、地図という要素により、行動の連なりを場所との対応によって示すことができる。
 - 15) 渡辺定夫 (研究者代表)：都市図研究報告書, 1986・87年度科学研究費補助金特別研究成果報告書中の絵図・図絵についての説明より
 - 16) 千野香織, 西和夫：フィクションとしての絵画, ペリカン社, p. 33, 1991. 5
 - 17) 堀淳一：地図—「遊び」からの発想, 講談社, p. 227, 1982. 10
 - 18) 同*15, p. ii
 - 19) 世田谷区では、毎月1回住民とともにまちづくりを考えるイベントを年間通して行っている。そのことをリレーイベントと呼び、1988年には、「まちづくり」、89年には「子どもと環境」、90年には「長寿社会と環境」というテーマのもとに行われ、現在も継続して行われている。
 - 20) 子ども・大人が環境とかかわりつつ、生命と感性を高揚させ、自発的に営まれる活動を企画・実践し、それをまちづくり計画のコンセプトに融合させることを予測解説する手法群を「まち遊び行動学」という。倉原孝孝, 延藤安弘, 横山俊祐：まちかどオリエンテーリングの有効性に関する考察—“まち遊び行動学”の視点から、都市計画論文集, No. 23, pp. 163～168, 1988
 - 21) 例えば、作者が暮らす団地に生息する野鳥から昆虫までの生き物の観察図を作った主婦は、作品を通して身近な環境に多くの豊かな自然があることを他者に伝えるときにも、在住する団地の更新計画が現実化しつつある中で、時をかけて育てられた自然の持つ価値を継承することの必要性を唱えている。また、絵地図大賞に選ばれた作品を子ども達と一緒に作った女性児童員は、翌年はまちの立体模型作りに取り組んだり、正月にはまちを背景に描いた双六を作って遊ぶなど、子どもと環境とのかかわりを自らも楽しみながら深めるようになっていく。
 - 22) 審査員は各自5, 6枚の札を持ち、推薦する作品にその札をおいていったが、例えば、甲乙つけがたい作品が最終2点に選ばれた“一般の部”では、2名ずつに票が分かれ、最後の一人の審査員がいずれに札を投げるかで決まるというスリリングなシーンもあった。大賞に決まった瞬間「ヤッター！」と大声をあげる応募者、喜びのあまり涙するお母さんなど、ドラマチックな審査会であった。
 - 23) 世田谷区のまちづくりコンクールは、1989年には「まちは学校、学校はまち」、1990年には「老後も住みつけられるまちづくり」、1991年には「虫と人と地球にやさしいまちづくり」のテーマのもとに開催され、地域に根づいた取り組みとして定着してきている。

(1991年7月10日原稿受理, 1991年12月27日採用決定)